

子どもたちのこと

## 九、ぼく、がんばるぞ！

大橋 利恵子

J男は二人兄弟の末っ子、おじいさん、おばあさんにかわいがられて育った秘蔵っ子である。幼稚園に入る前から、母親は心配だったようで、「きつとうまくやっつけていけない」と思う気持ちと「でもあの子なら」と思う気持ちが複雑に交差していたようである。

四月入園式から一週間、第一関門は思ったより順調に、しかし、とても緊張して過ごした。ほとんど声を聞かない日々だった。

五月になると、友だちとブロックや砂場などで遊べるようになり、少々元気が出てきた。教師にも少しずつ話ができるようになり、やれやれ順調で何よりと思っていたのに、第二関門はちゃんと待ちうけていた。それは給食だった。好きな物だけは食べるのだけれど、それはごくわずかな種類でほとんど食べられない。給食のない土曜日が大好きな日になってしまった。それでも、周囲の子と共に、少しずつがんばって食べるようになり、一ヶ月もたつと時間はかかっても一応食器をからっぽにすることができるようになり「せんせ

い、たべちゃったよ」と大きな声で報告できるようになった。

こうして迎えた六月がJ男にとっては一番よい月だったようである。家でかたつむりをつかまえて持ってきたのをみんなに認められ、その日から、一匹か二匹のかたつむりをつかまえてくるようになった。もうすっかり園になじみ、悩みなどないかのようにみえたのだが、第三関門もちゃんと待ちうけていた。それは何とプールだったのである。

七月一日 プール開き、その三日前ぐらいから家では「いやだな 幼稚園休もうかな」と言っていたそうである。しかし、少々寒い日だったので、短時間で切りあげたことも手伝ってか、初日はごくスムーズにプールに入れ、J男も「何でもないや」と思えたようだった。家でも「もう泳げる」と意気さかんだったようである。

その後少し慣れたある日、「ワニ歩き」と称する水の中で足を伸ばし手で歩くことに挑戦していた。J男にもやってみるように薦め、おなかをかかえて手を下におろさせた。J男は手足をバタバタさせたので、そのまま手を離し「できそうじゃない？」と聞くとJ男はいそいでその場から離れていってしまった。このことがどんな意味を持つことになるか、その時の私には予想もつかず、他の子へと手を伸ばしていった。

その日のJ男は何も食べない。いつもならすぐぐんばってたべるJ男だけに心配になり、熱をはかるとほんの少しだけ熱がある様子。とりあえず、母親に連絡して帰した。翌日、朝泣いて登園をいやがる。少々疲れぎみなのではなどと気楽に考え、その日は一応半日で帰した。そして次の日、さらに登園拒否、給食もほとんどたべない。私にはわけが

わからず、ただ「あんなにがんばっていたのにどうしたの？」と聞くのみで……。その次の日、母親から「プールカードに。印はつけてなくても健康ですので入れます」と連絡がきて、はっと気づいた。そうか、あの時、こわかったんだ！

原因がわかれば対策もたつ。もともと気が弱すぎるけれど、がんばる気持はあるJ男。ワニ歩きを自分のものにしてしまえば、きっと元にもどれる。そう思った私は、よいお天気でもうしても水に入りたくなるような日まで待った。そして、その日、水に入るのがとてもいい気持の日、浅い所でまだワニ歩きのできない子に一人一人時間をかけて指導していった。J男にも、絶対抱いているからと約束して、段々に水へ入れた。そして足をのばして歩けた時にすぐく拍手をして喜びほめた所、もう自信を持ったらしく、すぐに友だちにもやってみせていた。その日以来、またあのがんばるJ男がかえってきた。

4才のこのデリケートなる子ども達に、何をどのように経験させていくのか、それがむずかしいということをまた実感した次第である。

(岐阜北幼稚園)